



TITLE:

マルクス＝エンゲルスのブルジョ
ア民主主義革命理論(一) - マルクス
主義におけるブルジョア革命理論
の發展(一) -

AUTHOR(S):

堀江, 英一

CITATION:

堀江, 英一. マルクス＝エンゲルスのブルジョア民主主義革命理論(一) -
マルクス主義におけるブルジョア革命理論の發展(一) -. 經濟論叢 1955,
76(2): 63-81

ISSUE DATE:

1955-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/132436>

RIGHT:

經濟論叢

第七十六卷 第二號

マルクス＝エンゲルスの

ブルジョア革命理論……………堀 江 英 一…(1)

現代フランス勞働政策史の一劃期……………向 井 喜 典…(21)

封建的所有と經濟外的強制を

めぐる理論的諸問題……………福 富 正 實…(44)

ペーカ・フイグーノフ

「ヨーロッパ人民民主主義諸國における

人民民主主義制度の發展の二つの段階

について」……………金 鍾 碩…(61)

〔昭和三十年八月〕

京都大學經濟學會

マルクス・エンゲルスのブルジョア民主主義革命理論(一)

——マルクス主義におけるブルジョア革命理論の發展(一)——

堀 江 英 一

は し が き

「共產主義とは、プロレタリアート解放の諸條件にかんする學說であり」(エンゲルス『共產主義の原理』——國民文庫版『共產黨宣言・共產主義の原理』七六頁)、そして「マルクスの學說の主要點は、社會主義社會の建設者としてのプロレタリアートの世界史的役割を解明したことになる」(レーニン『カール・マルクスの學說の歴史的運命』——國民文庫版『マルクス・エンゲルスのマルクス主義(一)』一一二頁)。

だから、マルクス・エンゲルスのおもな仕事はプロレタリアートの解放、したがつて終局的にはプロレタリア革命の客觀的・主觀的諸條件の解明にさざげられなければならないかつた。マルクスの經濟學上の偉大な業績——『資本論』は、プロレタリアートの解放・プロレタリア革命の客觀的諸條件を資本主義の運動法則そのもののなかから、ときあかそうとしたのである。マルクスやエンゲルスにとつて、この客觀的法則はプロレタリアートの主觀的法則——戰略戰術論に轉化されなければならないかつた。つまりマルクスとエンゲルスの政治學であるが、かれらはそれ

をプロレタリア革命とりわけ「プロレタリアートの獨裁」というかたちで追求していつたのである。そうしたものととして、「共產主義とは、プロレタリアート解放の諸條件にかんする學説である。」

いまいつたように、マルクス・エンゲルスのおもな仕事はプロレタリアートの解放、プロレタリア革命の客觀的・主觀的諸條件の解明に多くさざげられたが、マルクスとエンゲルスとが當面した現實、とりわけかれらの母國であるドイツでは、多くの絶對主義國家が分割統治しており、それがプロレタリアートの解放の條件を提供する資本主義社會の發展をさまたげていた。マルクスとエンゲルスが當面したドイツの現實はブルジョア革命の時代であつた。そこで、マルクスとエンゲルスとは、かれらが實踐的革命家であらうとするかぎり、當面するブルジョア革命とプロレタリアートの終局目標であるプロレタリア革命とをどう關聯づけるか——ブルジョア革命のなかでどうしてプロレタリアートの解放條件をつくりだしてくるか——という問題を解決しなければならなかつた。ドイツの眞正社會主義やラッサール主義はこの問題をとびこえてしまつた。かれらはブルジョア革命の段階にブルジョアジの進歩性を否定し攻撃をそこに集中することによつて、絶對王政をまもりそれと妥協して、結局するところブルジョア革命を否定するという反動的立場にたつこととなつた。マルクスとエンゲルスは、ブルジョア革命の遂行のなかからプロレタリアートの解放の條件をつくりだすという實踐的立場から、端的にいえばブルジョア革命をプロレタリア革命に發展させ轉化させるといふあの永續革命論の立場から、ブルジョア革命と眞正面からとりくんでいつたのである。ブルジョアジのブルジョア革命理論とマルクス・エンゲルスのブルジョア革命理論とは、この點で、根本的に、ちがつている。かれらのブルジョア革命理論はプロレタリアートのブルジョア革命理論である。

マルクスとエンゲルスは、かれら自身が參加し指導した三月革命前後に、かれらのブルジョア革命理論を展開し、

この革命を指導するなかでかれらのブルジョア革命理論を發展させていつた。わたしは、まずこの時期のおもな關係著作から、ついでそれを補う意味でその後の著作から、かれらのブルジョア革命理論を紹介し、その發展をたどることとしたい。わたしがここで自分に課した課題は、マルクス・エンゲルスのブルジョア革命理論をその發展に即しながら、統一的に讀者に紹介することである。本題にはいることとしよう。

一 三月革命の前夜

『共産黨宣言』は一八四八年のフランス二月革命とドイツ三月革命の直前に發表された。それは、マルクス主義の「完全な、系統的な、今日なお最良のものとしてのこつてゐる敘述」であるばかりでなく、それには「マルクス主義の一般的基礎の敘述とならんで、その當時の具體的な革命的情勢が、ある程度まで表現されている」(レーニン「國家と革命」——國民文庫版三六頁)。レーニンがここで「その當時の具體的な革命的情勢が表現されている」といつてゐるのは、おそらく、その戰術的綱領をのべた「四種々の反政府黨に對する共產主義者の立場」をさしてゐるのであるが、そこではマルクス・エンゲルスはとくにくわしくドイツの來るべきブルジョア革命における共產主義者の戰術を規定してゐる。さらにエンゲルスは一八八四年になつて、ドイツのブルジョア革命に關するこの戰術的綱領をそのまま引用して、「戰術的綱領がこれほど正當にのべられたことはなかつた。革命の前夜に提出されて、それは革命の試練にたえた。このときいろいろ、勞働者政黨が宣言からずれたときはいつでも、ずれはその罰をうけた」と書いた(エンゲルス『マルクスと「新ライン新聞」——マルクス・エンゲルス選集第三卷三頁)。だから、わたしは革命前夜の著作として『共産黨宣言』をとりあげねばならないが、それにさきだつて、もう一つの

著作——エンゲルスが一八四七年三月—四月に執筆した未完稿『ドイツのスタトゥス・クオ』をとりあげる必要がある。

そのなかで、エンゲルスはこう書いている——「プロシヤ連合國會の召集（一八四九年二月三日——筆者）をもつて、ドイツのスタトゥス・クオ（絶対王政とよむべきである——筆者）にたいするたたかいは一つの轉換點にたつた。スタトゥス・クオがあいかわらず存在しつづけるか、それともほろびるか、この國會の行動いかににかかっている。いまだにしごくあいまいで、ごつちやに交錯し、イデオロギーの小さな區別だてばらばらになつてゐるドイツの諸政黨は、いまや、いやおうなしに、彼らの代表する利害、とるべき戰術をあきらかにし、自己を他から區別し、實踐的行動にでなければならぬ。これらの諸黨のうちでもつともわかい共產主義黨も、この必然性からのがれることはできない。彼らもまたその立場について、その戰闘計畫について、その手段について、はつきりした認識をもたなければならぬ。そしてそれに到達するための第一歩は、おしよせてくる反動的社會主義者たちを否認することである」（エンゲルス『ドイツのスタトゥス・クオ』——マルクス・エンゲルス選集第一卷二三—三頁）。エンゲルスはこの論文を共產主義者同盟の組織計畫が進行しているとき書いたのであつて、いま引用したエンゲルスの言葉はせまりつつある革命に對應してうまれた共產主義者同盟とその綱領『共產黨宣言』との必要性をといっているとみてよからう。それだけに『ドイツのスタトゥス・クオ』はせまりつつあるドイツのブルジョア革命に關するエンゲルスの戰術的綱領をくわしく述べている。

『共產黨宣言』がプロレタリア革命—プロレタリアート獨裁の客觀的・主觀的條件とその必然性を規定し、最後に第四章の「種々の反政府黨に對する共產主義者の立場」のなかで部分的にドイツのブルジョア革命の問題をと

りあつかつてゐるのに對して、『ドイツのスタトウス・クオ』は『共產黨宣言』で戰術的綱領として壓縮されたドイツのブルジョア革命の問題を中心にしてゐる。『ドイツのスタトウス・クオ』と『共產黨宣言』とは相補つて、革命の前夜におけるマルクス・エンゲルスのブルジョア革命理論をしらしてくれる。

エンゲルス『ドイツのスタトウス・クオ』（一八四七年）

I プロレタリアートにとつてのブルジョア革命の意味

エンゲルスは、この論文のなかで、二つのことをいつてゐる。第一に、「ブルジョアジーは、いわば、吾々の自然の敵であり……それがたおされると吾々の黨が支配者の地位につくところの敵である」（マルクスイーエンゲルス選集第一卷二三三頁）と述べ、ブルジョアジーの打倒がプロレタリアートの終局目標であることをあきらかにしてゐる。

だが、それにつづいて、第二にエンゲルスは、「ドイツのスタトウス・クオは、それ以上に吾々の敵である。というのは、それは吾々とブルジョアジーとのあいだにたつてゐるからであり、吾々がブルジョアジーに肉迫するのをじやましてゐるからである。それゆゑ吾々はドイツのスタトウス・クオとたたかう反對派大衆からけつして身をひくことはしない」（前掲書二三三頁）と述べ、ブルジョア革命を、プロレタリアートが自らを解放する條件の獲得として、規定してゐる。そのかぎりて、プロレタリアートは「ドイツのスタトウス・クオとたたかう反對派大衆から身をひくことはしない」ばかりか、「その最前線をすすむ一派——しかもブルジョアジーにたいするあからさまの底意によつてまつたく確乎たる立場をしめてゐる一派」（前掲書二三三頁）である。

こうして、エンゲルスにとつては、プロレタリアートはブルジョアジーをうちたおし自らを解放するためには、

まずもつと絶對王政をうちたおしてブルジョアジーに決戦をいどむ場——條件をかちとらねばならなかつた。

Ⅱ ドイツ革命における革命と反革命

そこで新しい問題がうまれてくる——せまりつつあるドイツ革命がブルジョア革命であるかぎり、ドイツのスタトゥス・クオに反對する階級はプロレタリアートだけでなく、プロレタリアートはスタトゥス・クオに反對する反政府黨の一つにすぎない。プロレタリアートはどの階級にたいしてたたかい、どの階級とともにたたかうべきか——エンゲルスはこの問題にこの論文の「二 スタトゥス・クオとブルジョアジー」のなかでこたえている。

エンゲルスは當時のドイツの階級關係をこう要約している——「まとめてみよう。貴族はあまりにおちぶれてしまった。小市民と農民とは、その生活地位の全體からいつて、あまりにもよい。労働者は、ドイツでは、支配階級として行動しうるまでには、まだまだ成熟していない。そこでのこるのはブルジョアジーだけである」(前掲書二四二頁)。こういう條件のもとでブルジョア革命がせまっていたのであり、エンゲルスはこういう條件のもとでの政治地圖を作製している。

反革命——スタトゥス・クオ

スタトゥス・クオすなわち絶對王政は中世後期の經濟狀態——封建的大土地所有と自治都市とがうみだした國家形態である。「ドイツの現制度は、貴族と小市民とのあいだの妥協にすぎず、この妥協はけつきよく第三の階級たる官僚に、實際の仕事をやだねてしまう結果になつてゐる。この官僚階級の構成には、たがいに契約をむすんで二大黨派が彼らの對照的な立場におうじて參加している。すなわち、より重要な生産部門を代表する貴族はよりたかい地位をしめ、小市民層は比較的にひくい地位にあまんじ、行政の高い地位へはただ例外的に候補者をおくるにす

ぎない」(前掲書二三四頁)。ドイツのスタトゥス・クオが、こうした貴族と小市民とに立脚するかぎり、それは資本主義の發展に對して封建的大土地所有と自治都市とをまもらうとする。

革命

エンゲルスはこのスタトゥス・クオをうちたおすべき階級を指示している——「このスタトゥス・クオをくつがえしうる階級が、現在、ドイツに存在しているであらうか? 存在している。……ブルジョアジーのなかに。」「ブルジョアジーは、すべての國々で官僚制的王制のなかでかためられた、貴族と小市民層との間の妥協をつくがえし、そのことによつて、なによりもまず自分自身のために、支配權を獲得する階級である。」それはかりでなく、「ブルジョアジーは、すくなくとも産業的土地所有者、小市民、農民、勞働者の大部分を、そして貴族の大部分をさえ、その利害にくわわらせてその旗のもとに統一した、ドイツにおける唯一の階級である」(前掲書二四四—四五頁)。

エンゲルスは、ブルジョアジーがあたらしい資本主義の發展を代表しているがゆえに、ブルジョアジーが他の諸階級を指導し、スタトゥス・クオにかわつて支配權を獲得する階級である、とまとめている。マルクス・エンゲルスはふたたび『共產黨宣言』でこれを確認するが、それについてのかれらの見解は一八四八年の革命を経験して大きくかわる。それについては後で述べなければならぬ。

ブルジョアジーに指導されて革命に参加する諸階級のうち、産業的土地所有者は「ブルジョアジーのうちの農業を利用してゐるグループ」・「一つのビジネス、一つの産業として農業をいとなむ」ブルジョア的地主(前掲書三八頁)であつて、かれらがブルジョアジーと同一行動をとることはいうまでもなく、また勞働者(作男・日雇勞働者——かれらは「農民」でなく勞働者であり、マルクス・エンゲルスの文獻で注意されねばならない——、手工業

職人・工場労働者、ルンペン・プロレタリアート)は、まだ雇主の精神的政治的統制に服し、「公けの問題の指導をひきうけるだけの準備がまだできていない」(前掲書二四二頁)。のこる二つの階級——小市民と農民は、ブルジョア革命期には貴族とブルジョアジーとのなかにはさまれて兩者の間を動搖し、プロレタリア革命期にはブルジョアジーとプロレタリアートとの間を動搖する「救いがたい階級」(前掲書二四〇頁)。小市民は貴族に壓迫されながら貴族とともにスタトゥス・クオの基礎を構成したが、資本主義の發展とともに、かれらは貴族からの政治的壓迫とともに大資本の競争にさらされて破滅は必至となり、「すくなくともブルジョアジーになりあがる可能性」(前掲書二三九頁)をもとめてブルジョアジーに追隨してゆく。農民は「小市民よりもより大きな勇氣をもっている點で、分のいい區別がなされる。そのかわり、歴史的發起力ということにかけては、およそ無能である」(前掲書二四〇頁)。「ドイツのスタトゥス・クオ」のなかでエンゲルスがあたえた情勢判斷は三月革命におけるマルクス・エンゲルスの行動と指導との基礎となつた。

マルクス・エンゲルス『共產黨宣言』(一八四八年)

I ドイツ革命の戰術的綱領

革命の直前一八四八年二月發表された『共產黨宣言』のなかで、マルクスとエンゲルスはいま述べた『ドイツのスタトゥス・クオ』の結論を確認している——

「ドイツでは、共產黨は、ブルジョアジーが革命的に行動するかぎり、ブルジョアジーと協力して絶対君主制、封建的土地所有、小町人とたたかう」(マルクス・エンゲルス『共產黨宣言・共產主義の原理』——國民文庫版七三頁)。

さらに、エンゲルスが一八四七年十月下旬にかいた『共産主義の原理』は『共産黨宣言』のいわば草稿にあたるものであるが、そこではこの命題がさらにくわしく展開されている――

「ドイツでは、ブルジョアジーと絶對王制との決戦がようやくせまつてゐる。しかしながら、ブルジョアジーが支配するまでは共産主義者とブルジョアジーとのあいだの決戦はあらかじめ期待できないから、共産主義者の關心は、むしろブルジョアをまたでるだけはやくたおすために、ブルジョアができるだけはやく政權をにぎることを援助することである。だから、共産主義者は政府に對抗して、いつも自由主義ブルジョアの黨を支持しなければならない。しかし、ブルジョアのおちいる自己欺瞞に感染したり、またはブルジョアジーの勝利の結果はプロレタリアートにも有益だという彼らの誘惑的な保證を信用しないように警戒しなければならぬ。ブルジョアジーの勝利が共産主義者にあたえる唯一の利益は、つぎの點にある。(1)共産主義者が、その原則を擁護し、討論し、普及させ、それによつてプロレタリアートを、かたくむすばれた、戰闘的な、組織された階級に統合しやすくするための、いろいろな自由。(2)絶對政府が瓦解する日から、ブルジョアとプロレタリアとのあいだの闘争の順番がやってくることの確實さ、のなかにある」(前掲書一〇二―三頁)

『ドイツのスタトゥス・クオ』で具體的に述べられ『共産黨宣言』で壓縮されているブルジョア革命におけるプロレタリア黨の戰術的綱領が、ここではだれにでもわかるようにみごとに定式化されている。だが、この戰術的綱領とくに自由主義ブルジョアの支持に關する部分は、「ブルジョアジーが革命的に行動するかぎり」という條件づきであつて、第二インタナショナルの理論家が理解したように無條件なものではない。マルクスとエンゲルスは『共産黨宣言』發表後一ヶ月のちにはブルジョアジーがすでに革命的に行動しなくなつてゐることをしつた。

II ブルジョア革命のプロレタリア革命への發展

『共産黨宣言』は『ドイツのスタトゥス・クオ』と『共産主義の原理』の命題を單に確認してゐるばかりでなく、ブルジョア革命に關する全く新しい命題の萌芽をふくんでいる。引用しよう――

「ドイツはブルジョア革命の前夜にあり……しかもドイツは、一七世紀のイギリスや一八世紀のフランスよりも、いつそう進歩したヨーロッパ文明全般の條件のもとで、またはるかに發展したプロレタリアートによつて、この變革を遂行する……したがつてドイツのブルジョア革命は、プロレタリア革命の直接の序曲となる」(前掲書七四頁)。

イギリスやフランスはプロレタリア革命を課題にのぼしており、せまつてゐるドイツ革命はそうした「進歩したヨーロッパ文明全般の條件のもとで」遂行されるのであり、しかもそれにはイギリス革命やフランス大革命のときより「はるかに發展したプロレタリアート」が参加する。そうした條件のもとでは、ドイツのブルジョア革命は「プロレタリア革命の直接の序曲になる」——直接にプロレタリア革命に轉化發展するというのである。このいわゆる永續革命論はマルクス主義のブルジョア革命理論の精華としてマルクス・エンゲルスとレーニンとによつて發展せられてゆくわけであるが、その萌芽と基礎は『共產黨宣言』のいま引用した文章のなかにすでにみられる。

附論——『共產黨宣言』の構成

わたしがいままで『共產黨宣言』から引用した言葉はすべてその最後の章「四 種々の反政府黨にたいする共產主義者の立場」からとられたものであるが、この章はそれぞれの國の共產主義者がとるべき當面の任務を規定している。ブルジョア革命の遂行は、共產主義者にとつて、當面の任務——終局の任務に達する不可缺の經過的課題であつて、終局の目標ではない。それは共產主義者の最初の綱領である『共產黨宣言』の構成のうえにみごとにあらわされている。

『共產黨宣言』の構成はつぎのようになつてゐる——

「一 ブルジョアとプロレタリア」(『共產主義の原理』——三問)

ここでは社會の歴史の發展法則とりわけ資本主義社會の運動法則かのべられ、ブルジョアとプロレタリアの階級闘争の發展とブルジョアの没落・プロレタリアの勝利つまり共產主義社會の實現との必然性が資本主義社會の運動法則から客觀的に基礎づけられている。これはとくに『資本論』のうちで充實されていく部分である。

「二 プロレタリアと共產主義者」(『共產主義の原理』一四—二三問)

ここでは共產主義者の終局の任務「終局目標が規定されている。この章の終りには、『労働者革命の第一歩は、プロレタリアートを支配階級にたかめること……である』と、プロレタリア革命を「プロレタリアートの獨裁」樹立と規定し、この「プロレタリアートの獨裁」權力によつてブルジョア生産様式を變革する諸方策十項をあげている(前掲書五四—五六頁)。

だから、ここにあげられている十方策は共產主義社會實現の、したがうてプロレタリア革命後の方策であつて、ものの『ドイツにおける共產黨の要求』のようなブルジョア革命綱領でない。林健太郎氏はこの二つの區別を全くしらないで、兩者を混同し、そこからマルクス・エンゲルスを攻撃する材料を見いだしている(林健太郎『三月革命と社會主義』——西洋史學Ⅺ一三一—一四頁)。林氏の攻撃は全く見當ちがいである。

「三 社會主義的および共產主義的文獻」(『共產主義の原理』二四問)

ここではいままで述べてきた共產主義者同盟の、したがつてマルクス・エンゲルスの共產主義の立場から、いろいろの當時の社會主義・共產主義を批判し、これらの似非社會主義思想からプロレタリアートをきりはなそうとしている。

「四 種々の反政府黨にたいする共產主義者の立場」(『共產主義の原理』二五問)

共產主義者はいままで述べてきたようなプロレタリア革命・共產主義を終局目標とするが、しかし「現在の運動のなかにあつて、同時に運動の未來を代表する」(前掲『共產黨宣言・共產主義の原理』七二)。こうして、當面の任務としてドイツではブルジョア革命への参加と指導との問題がでてくるのであるが、『ドイツにおける共產黨の要求』はここに接續するのである。こうした構成はその後の綱領構成の模範になつてゐる。附言したのはそのためである。

二 三月革命期

ヨーロッパをそしてドイツの革命はエンゲルスが豫期したよりはやかつた。かれは一八四八年一月二十三日發表の『一八四七年の運動』という論文のなかで、「一八四九年には、王が欲しようと思ふと欲しまいと、議會が召集されなければならぬだろう、そのときまで吾々は國王陛下に猶豫をあたえる、それ以上はあたえない」(マルクス・エンゲルス選集第二卷一五八頁)と、プロシヤ革命の勃發を一八四九年に豫期して準備をすすめていた。革命は豫想より一年はやかつた。まず一八四八年二月二十三日のパリ蜂起で二月革命がはじまり、つづいて三月一日ウィーン蜂起・一八日ベルリン蜂起でドイツ三月革命がはじまり、ヨーロッパは革命の坩堝^{ルツ}のなかになげいれた。

マルクスとエンゲルスはこの革命のなかにとびこんでいった。かれらはドイツの三月革命に参加しこれを指導した。そしてこのドイツのブルジョア革命の實踐のなかで、マルクスとエンゲルスはそのブルジョア革命理論を發展させていった。その發展を簡単に要約してゆくとしよう。

マルクス・エンゲルス『ドイツにおける共産黨の要求』(一八四八年三月)

革命の勃發とともにパリにうつつた共産主義者同盟中央委員會は、ドイツ人共産主義クラブをつくり、ここにあつまつた亡命ドイツ人三〇〇(四〇〇)の勞働者を革命に参加させるためにそれぞれ故郷におくりかえしたが、同時にマルクスとエンゲルスの手になる『ドイツにおける共産黨の要求』を印刷して『共産黨宣言』とともに歸國するドイツ人にもたせた。だから、『共産黨宣言』と『ドイツにおける共産黨の要求』はあわせて一體としてドイツ革

命の指導方針をなすものであり、さきに書いたように『ドイツにおける共産黨の要求』は『共産黨宣言』の最後の章「種々の反政府黨に對する共產主義者の立場」を具體化し發展させたブルジョア革命綱領であるが、しかし兩者の間にはかなりの發展がみられる。ながいが、引用しよう――

「一 全ドイツを單一不可分の共和國と宣言すべし。

二 刑罰をうけたことのない廿一歳以上のドイツ人は、すべて選舉權ならびに被選舉權をもつ。

三 國民代表は給料を支拂い、勞働者もまたドイツ國民議會に議席をもちうるようにすべし。

四 全國民の武裝。

五 裁判は無料とする。

六 これまで農村住民の重荷になつていたいつさいの封建的負擔、すなわちいつさいの賦課、賦役、十分の一税等はなんらの賠償なしに廢止する。

七 王侯地その他の封建的領地、すべての鑛山、炭坑等を國有にすべし。これらの領地では農業を國民全體の利益のために、大規模かつ最新科學の方法をもつて經營すべし。

八 農民の土地に設定せる抵當權を國有と宣言すべし。その抵當權の利子は農民から國家に支拂うべし。

九 小作制度の發達した地方では、地代あるいは小作料はこれを租税として國家に支拂うべし。

以上六、七、八、九の各項にのべた政策は、國費の支辨に必要な財源を縮減すること、また生産そのものをそこなうことをさけつつ、農民と小作人との公共的その他の負擔を輕減することを目的とするものである。

一〇 いつさいの私營銀行を廢止し單一の國立銀行をこれにおきかえる。この銀行の發行する紙幣には、法定相場があたえられる。この手段によつて、信用制度を全國民の利益にしたがつて大金融家の支配をくつがえすことが可能になる。この手段によれば、金銀はしだいに紙幣にかえられるから、商品交易に缺くことのできない要具である一般的交換手段の費用は低減され、金銀は對外的操作にむけることができる。最後にこの手段は、保守的ブルジョアジの利害を革命にむすびつけるため必要である。

一一 鐵道、運河、汽船、道路、郵便等、いつさいの交通機關を國家はその手中におさむべし。これらのものを國有にし、無差階級の管理にうつすべし。

一二 すべての國家官吏の俸給を均一にする。

一三 教會の國家からの完全な分離。

一四 相續權の制限。

一五 高度の累進税の實施と消費税の撤廢。

一六 國營工場の設立。國家は全勞働者の生活を保障し、勞働不能者を扶養すべし。

一七 無料の一般國民教育。

以上の諸政策の貫徹に全力をもつてあたることが、ドイツのプロレタリアートと小ブルジョア層と小農民層の利益である。なぜならば、これらの諸政策を實現するときはじめ、これまで少數者に搾取され、將來もまた彼らによつて抑壓されようとしている數百萬の民衆は、自己の權利と、いつさいの富の生産者として自分らに當然あたえらるべき權力とを、獲得することができからである」(エンゲルス『共產主義者同盟の歴史』——マルクス・エンゲルス選集第二卷四四三—四四頁および四五八—五九頁)。

これはプロレタリアートの最初のブルジョア革命綱領であり、マルクスとエンゲルスとの三月革命における活動と指導との方針であつた。これを要約的に分類すれば、四つになる——

政治的要求 一・二・三・四・五・一二・一三・一四・一五・一七。これら十項目の要求のうち、マルクス・エンゲルスが最も重視したのは民主主義的原則に立脚する單一不可分のドイツ共和國である。

農民の要求 六・七・八・九。封建的諸制限の撤廢が中心である。

勞働者の要求 一〇・一一・一六。ここには資本主義の域外にはみだした諸要求、端的にいえば共產主義的諸要求はみられない。のちにレーニンが明言したように、プロレタリアートのブルジョア革命の要求は改良主義的でなければならぬ。

革命諸階級　むすびの文章。そこではこうした諸要求——一括してブルジョア革命を遂行できるのはプロレタリアート・小市民層・小農民層となつていて、『ドイツのスタトオス・クオ』と『共產黨宣言』にみられる指導階級ブルジョアジーがぬけている。この變化をすでに、マルクスとエンゲルスは革命の進行と経験とのなから、うみだしていたのである。

いままで述べてきた『ドイツにおける共產黨の要求』は『新ライン新聞』を通じてドイツ人によびかけられた。だから、それは『新ライン新聞』のなかのマルクスとエンゲルスとの論文で具體化され解説されているわけである。

マルクス・エンゲルス『新ライン新聞』（一八四八年六月—四九年五月）

『新ライン新聞』に發表されたマルクス・エンゲルスのおもな論文は『マルクス・エンゲルス選集』第三卷にあつめられており、しかも選集のこの卷にはエンゲルスの一八八四年の論文『マルクスと一八四八—四九年の「新ライン新聞」』がかげられているが、エンゲルスのこの論文から『新ライン新聞』におけるマルクス・エンゲルスの指導方針を的確にすることができる、

I　三月革命におけるマルクス・エンゲルスの立場

エンゲルスは常時を回想しつつ、「ドイツのプロレタリアートがあるものではなくそれがなるおそれがあるもの、およびフランスのプロレタリアがすでになつたものにおびえて、ブルジョアジーは、そのすくいをただ君主制と貴族制とのある種の妥協、もつとも卑劣でさへある妥協にのみみだした」（『マルクスと「新ライン新聞」前掲書四頁）といつている。ドイツのブルジョアジーはブルジョア革命勃發のときすでにブルジョア革命を裏切つた。マルクスはとくに『危機と反革命』（一八四八年九月）と『ブルジョアジーと反革命』（同年十二月）のなかで系統的にブルジ

「アジのこの裏切りをあばきだした。革命の前夜——『ドイツのスタトゥス・クオ』や『共産黨宣言』で革命の指導階級とされていたブルジョアジが革命直後の『ドイツにおける共産黨の要求』でさえさつた理由はここにある。ブルジョアジはいわゆる六月事件よりはるかまゝに反革命に身をゆだねていた。

エンゲルスはつづいていう。「プロレタリアートの廣汎な大衆は、まだそれ自身の歴史的役割を熟知せず、なによりもまずブルジョアジの推進的極左翼の役割をえんじなければならなかつた。ドイツの勞働者はなによりも階級黨としての彼らの獨立組織に缺くことのできない諸權利——出版、結社および集會の自由——を獲得しなければならなかつた」。また「そこで吾々がドイツで一つの大新聞（『新ライン新聞』——筆者）を創立したとき、吾々の旗幟はことのなりゆきからきめられていた。それは民主主義の旗いがないものにはなりえなかつた。しかし、どこでもその旗にいまだかつてかかれえなかつた特殊なプロレタリア的性格を個々の點に強調した民主主義の旗であつた」（『マルクスと『新ライン新聞』前掲書四頁）。

こうして、マルクスとエンゲルスはがつて共産主義同盟員は、「ブルジョアジの推進的極左翼」つまり小ブルジョアジの「民主黨」のなかにはいり、小ブルジョアジとともに（ブルジョア）民主主義を極限まで貫徹するという方針をとつた。かれらは、小ブルジョアジが勝利したときプロレタリアートを裏切ることをしつていたが、プロレタリアートがまだ階級として自覺していない當時、かれらの任務を「ブルジョアジの推進的極左翼」と規定するはかなかつた。かれらは小ブルジョアジの黨「民主黨」に入黨してライン州委員會の委員となり、『新ライン新聞』はその機關紙として出發した。

註　マルクスとエンゲルスは、おそくとも『ドイツにおける共産黨の要求』を執筆した一八四八年三月末には、ブルジョアジ

の裏切りとブルジョア革命における小ブルジョア・小農民・プロレタリアの同盟を考えていた。だから、レーニンと抗争したメンシェヴィキのブルジョア革命戦術論はけつしてマルクス主義の傳統をつぐものでなかつたといえるであろう。

しかし、この民主主義は、マルクスとエンゲルスにとつては、ドイツの労働者を「階級黨としての彼らの獨立組織」に組織するための缺くことのできない前提條件であつたのであり、かれらは「ドイツに存在する公然たる黨のもつとも極端なもの（民主黨——筆者）が政權につくときにこそ、吾々が代表する傾向はわが黨の眞の目的のための闘争にすすみうるであらう、そして吾々はそれの反對黨をつくるであらう」（エンゲルス前掲論文九頁）と公然と宣言した。マルクスとエンゲルスは、こうして、「現在の運動のなかにあつて、同時に運動の未來を代表」（『共產黨宣言』——國民文庫版七二頁）しようとした。

だが、マルクスとエンゲルスが實現しようとした（ブルジョア）民主主義はどうしたものであつたか？

Ⅱ 「單一不可分の共和国」

さきにあげた『ドイツにおける共產黨の要求』の第一項が「全ドイツを單一不可分の共和国と宣言すべし」となつており、エンゲルスはのちに『「新ライン新聞」の綱領はつぎの二つの主要點からなつていた。單一不可分のドイツ共和国とポーランドの復興をふくむロシアとの戦争がそれである』（『マルクスと一八四八—一九年の「新ライン新聞」前掲書六頁）と述べている。三月革命におけるマルクス・エンゲルスの政治的要求は「統一そして自由」Einheit und Freiheitであつた。『「新ライン新聞」は創刊草々の一八四八年六月二日エンゲルスの『民主黨論』、六月七日『フランクフルト議會の急進民主黨の綱領と左派の綱領』をのせて、これを宣明した。

エンゲルスはいま引用した綱領を説明していつている——。

「プロレタリアートの利害は、ドイツのプロシヤ化をも小國分立政策の永續（連邦共和國—筆者）をも同様にゆるさなかつた。この利害はドイツの一族族國家への最後の統一を至上命令とした。そしてその民族國家だけがすべての傳統的な些細な障害物をもはらいきよめ、プロレタリアートとブルジョアジーが彼らの力をくらべるべき戦場を用意しうる。だがプロレタリアートの利害は同様にプロシヤを首長とすることをゆるさなかつた。その全組織、傳統、王朝を有するプロシヤ國家はドイツにおける革命が打倒すべき唯一の國內の強敵であつた。そしてさらにまたプロシヤは、オーストリアのドイツ人地域の排除により、それを分離することによつてのみ、ドイツを統一しえた。プロシヤの解消とオーストリア國家の瓦解、共和國としてのドイツの眞の統一——吾々はその他のなんらかの當面の革命的綱領は採用しえなかつた。そしてこれは、ロシアとの戦争をつうじて、ただこの手段をつうじてのみ、實現することができた」（『マルクスと「新ライン新聞」』前掲書六一七頁）。

こうしてマルクスとエンゲルスは、プロレタリアートの將來の利害の立場から、ドイツの當時の小國分立狀態・プロシヤの小ブルジョア民主主義者の希望した民主的プロシヤ皇帝をいたゞく北ドイツ統一・南ドイツの小ブルジョア民主主義者の連邦共和國に反對して、「單一不可分のドイツ共和國」を強調した。これからはずれたとき、のちに述べるように、ラッサール主義者やカウツキーはマルクスとエンゲルスから徹底的な批判をうけねばならなかつた。これがマルクス・エンゲルスのブルジョア革命における『國家と革命』である。

Ⅲ 封建的諸制限の撤廢

「單一不可分のドイツ共和國」という綱領はそれ自身封建的大土地所有貴族の政治支配、絶對王政の革命的變革を意味しているのであるから、したがつて經濟的要求の中心は貴族の政治支配の經濟的基礎をなしている封建的大土地所有の清掃——ブルジョアの農業の基盤確立でなければならぬ。レーニンも労働者要求の改良主義に農業綱領の革命的性格を對置している。

ドイツのブルジョアジーが、プロレタリアートをおそれるあまりに、絶對王政と妥協したことは、かれらがその

まま封建的大土地所有を温存しようとしたことを意味する。エンゲルスの『買戻しについてのパトフの覺書』（一八四八年六月二十五日）・『封建的貢租の廢止についての法案』（同年七月三十日）、マルクスの『ブルジョアジーと反革命』（同年十二月十日以後）などはブルジョアジーのこの裏切りを暴露している――

「一八四八年のドイツ・ブルジョアジーは、彼らのもつとも自然な同盟者であり、血をわけた肉親であり、そしてそれとむすばずして彼ら自身が貴族にたいして無効であるところのこれらの農民を、なんの躊躇もなしにうらざる」。「(幻想上の)買戻しの形式によつて封建的諸權利を存続させ、それを認可すること、これがすなわち一八四八年のドイツ革命の成果である」(『封建的貢租の廢止についての法案』前掲書九八頁。なお『ブルジョアジーと反革命』前掲書三七六―七頁参照)。

だから、いまや封建的大土地所有の撤廢、『ドイツにおける共產黨の要求』の農民の要求は、ブルジョアジーによつてではなく、小市民・小農民・プロレタリアートの同盟によつて實現されることとなるのである。

註 封建的大土地所有の撤廢の問題について、マルクスとエンゲルスはすでに三月革命の初期にブルジョアジーの裏切りをしつていた。かれらはブルジョアジーと小市民・農民・プロレタリアートとの間に境界線をひていた。メンシエヴィキはこれを見失ったが、レーニンマルクス・エンゲルスのこの傳統のうえにかれのブルジョア革命理論をきずきあげた。

IV Salut public ― 革命的獨裁

それならば、こうしたブルジョア革命を貫徹するためには、どうすればよいのか？ マルクスは『危機と反革命』のなかで書いている――

「革命につずくいかなる過渡的國家も、つねに獨裁を、しかも精力的な獨裁を必要とする。吾々がはじからカンブハウゼンを非難したのは、彼が獨裁的に行動しないで、ふるい諸制度の殘存物をただちに粉碎し、とりのぞくことをしなかつたからである。そこでカンブハウゼン氏が立憲的な夢にまどろんでいるあいだに、敗北した黨は、官僚と軍隊のうちにその地歩を強化し、あちこちで公然たるたたかいをさえいとむまでになつたのだ」(前掲書二六五頁)。「すべて立憲化されていない狀態のもとでは、あ

れやこれやの原則ではなしに、ただ *Salut public*、公安ということだけが規準となる」(前掲書二六六頁。なお七三頁参照)。

絶對王政の側からの反革命の企てがあきらかとなつたとき、マルクスとエンゲルスは一八四八年九月ライン各地に人民集會をひらいて、「精力的な獨裁」——フランス大革命がうみだした權力形態である公安委員會をよびかけた。それは、いうまでもなくプロレタリアートの獨裁ではなく、絶對王政の反革命を鎮壓してブルジョア革命をまもりぬく革命權力としての獨裁——十一月のウィーンとベルリンとの敗北の原因となつた臆病さの對立物、を意味している。

註

こうした革命的獨裁の思想を、マルクスとエンゲルスはフランス大革命の經驗からひきだしたが、レーニンは一九〇五年の第一次ロシア・ブルジョア革命のとき農民獨裁權力としての臨時革命政府の問題にこの思想を發展的に適用した。レーニンは、とくにかれの『國家と革命』のなかで、この思想をプロレタリアート獨裁論としてくわしく展開した。